

# ディズニー作品からみる人種差別

## — 『南部の唄』を巡る日本の反応から—

鈴木美桜

近年、東京ディズニーリゾート内のBGMから『南部の唄』の挿入歌である「Zip-a-Dee-Doo-Dah」が次々と削除されている。本論文では、ディズニー作品の『南部の唄』と、それが題材となったディズニーパークのアトラクション「スプラッシュマウンテン」を中心に、人種差別の問題について、実写版『リトル・マーメイド』への反応を踏まえつつ検討した。

1946年に公開された『南部の唄』は、当時の黒人奴隷制度の事実を美化して描いたことで、人種差別の観点から問題となっているディズニー作品である。そんな『南部の唄』を題材としたディズニーランドのアトラクションに「スプラッシュマウンテン」がある。スプラッシュマウンテン自体に直接的な差別表現はないものの、『南部の唄』の人種差別問題を受け、アメリカではスプラッシュマウンテンの題材変更を求める署名活動が起こり、20000名以上の署名が集まった。そして、フロリダとカリフォルニアのスプラッシュマウンテンは、『南部の唄』から、ディズニー史上初となる黒人プリンセスが描かれた『プリンセスと魔法のキス』に題材変更されることが決定し、2024年の再オープンに向けて現在閉鎖されている。

アメリカのディズニーランドでは署名活動と題材変更が起こるほどに問題視されている『南部の唄』とスプラッシュマウンテンだが、日本の反応について知るために、アンケート調査を行った。調査結果からは、日本人の人種差別問題に対する無関心さや軽視の傾向、無意識に人種差別問題を容認するような意見が目立った。

また、2023年に実写化された『リトル・マーメイド』では、アニメーション版と異なるビジュアルの黒人キャストが選ばれたことで、人種差別的な誹謗中傷が寄せられ問題となった。「アニメ版を尊重したいだけで、黒人差別ではない」という理由づけのされた、自覚のない人種差別的発言が多くみられた。

人種差別問題が直接的である『リトル・マーメイド』でさえ人々は自分が差別的である自覚をもたないため、直接的な差別表現がないスプラッシュマウンテンではなおさらである。アメリカでは大きな課題とされていることも、日本では関心をもたない人がほとんどであり、自分が差別的であることに気づいてもない。東京ディズニーランドでもスプラッシュマウンテンの題材変更が行われるとしたら、その背景にある問題点に目を向け、無意識に人種差別をしている可能性を自覚するきっかけにしてほしいと考える。